

# 《2010年1月例会報告》

【日時】2010年1月20日（水）19：00～21：00（その後「ルン」。～23：50。電車に乗って帰りました！）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】2018/2022年 FIFA ワールドカップの招致活動

【参加者（会員）14名】相原正道（日本トップリーグ連携機構） 阿部博一（日本サッカー史研究会） 井上俊也（会社員） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 笠野英弘（日本スポーツ振興センター） 北原由（青梅 FC／武蔵野北高校） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 五香純典（2018/2022年 FIFA ワールドカップ日本招致委員会実行本部） 嶋崎雅規（帝京高校） 白井久明（弁護士） 高田敏志（町田高ヶ坂 SC コーチ） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 松岡耕自（立命館大学サッカー部）

【参加者（未会員）5名】上野直彦（(株)ACT） ★尾崎和仁（ビバ！サッカー研究会） 白髭隆幸（日本スポーツプレス協会） ★関口秀之（ゴール(株)） 竹中茂雄（FC戸越）

【ルンからの参加者】高橋義雄

【報告書作成者】岸卓巨

注1) ★は初回参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 2018/2022年 FIFA ワールドカップの招致活動

五香純典（2018/2022年 FIFA ワールドカップ日本招致委員会実行本部）

\*\*\*\*\*

### < 目次 >

I. プレゼンテーションー2018/2022年 FIFA ワールドカップ招致活動の概要

II. ディスカッション

1. FIFA ワールドカップ招致活動をめぐって
2. なぜ、いま、日本で FIFA ワールドカップなのか？
3. 今後、どのようにアピールしていくか？

III. まとめ

# I. プレゼンテーション

## －2018/2022年 FIFA ワールドカップ招致活動の概要（五香純典）

### <はじめに>

こんばんは。日本サッカー協会から出向という形でワールドカップ招致委員会の事務局で統括をやっています五香と申します。よろしくお願ひします。実はサロンでは幽霊会員として、9年ぶりにここに来ました。もっとさかのぼると、僕は教育実習生として中塚先生のもとで指導を仰いだ経験があります。

私の簡単な略歴を申し上げますと、筑波大学のサッカー部を出た後、筑波大学の大学院でスポーツ社会学を研究しました。1年間イングランドに留学した時期もありながら、帰ってきて修論を完成させました。その後、2002年 FIFA ワールドカップ直前に、4ヶ月間 JAWOC で働き、日本サッカー協会に入ったという経緯があります。既に8年ぐらい経つんですけども、実際にワールドカップの招致に携わるようになったのは4月からという形になっております。

今日は、中塚先生からお話をいただき、非常に貴重な場だと思い、やらせてくださいとお願いしました。2002年当時、私は運営の方では携わっていただけんですけども、招致のところは全然経緯が分からなくて、いろいろな報告書を見て勉強はするものの、当時の担当者の皆さんがどのような気持ちでやられたかは分かりませんでした。実際に2002年の後の報告レポートを読んで、議論されていく中で、今回2018年、2022年をどのような位置づけにすべきなのかということ、私たちも日々考えながらやっているところでもありますので、ぜひ皆さんにこの場で意見をいただきたいと思っております。

### <招致の概要>

まず、ワールドカップ招致自体は、メディアにそんなに出ていません。実際には、去年の1月くらいから招致活動を始めることを決め、2年弱で決めてしまおうという招致ですので、なかなか世の中に伝わる期間が十分ないというのが1つあります。それから、日本として体制が整うまでに時間がかかってしまったという経緯もありますので、改めて招致の概要をお伝えしたいと思います。

2002年のワールドカップは7年前ですが、当時の盛り上がりを表す数字としては、例えば視聴率や観客動員数、経済効果などがあり、私自身も当時を振り返ってすごかったなというのはあるんですけども、実際にはそこから2006年のドイツ大会、2010年の南アフリカと、どんどんワールドカップのバージョンが上がってきていると感じています。それは、規模や人気も含めてですね。

簡単に数字をご紹介すると、ドイツ大会では観客動員数が340万人以上、テレビ中継では延べ260億人が視聴したということ、ブラッターなどはかなり誇りに言っています。オリンピックでは60億人が見ているけれども、ワールドカップでは260億人だというオリンピックとの比較を強調しています。

経済効果というところをいくと、共催が決まった後の試算では約3兆円と言われておりますので、単独開催では、倍とまではいかななくてももっとあったらろうということを押さえておきたいと思ひます。

当時、日本が得たもの、もしくはもたらしたもののというのは、あったと思ひます。サロンの中でもいろいろと語られていると思うのですが、当然日本としては、国際交流やボランティア意識の向上など、無形の財産がそこで培われたということが挙がる

と思います。実際に世界から見た時に日本のすばらしさというのは、今なお際立っていると、世界のメディアや FIFA のメンバーと話していると実感としてあります。FIFA から「World Cup of Smiles」と称されました。

### <立候補国>

他にどこの国が手を挙げているのかというところで行くと、ヨーロッパでは、スペインとポルトガル、ベルギーとオランダの共催を 1 として数えると 4 つが手を挙げています。アジアでは、オーストラリアもアジアに含まれるので、全部で 5 つの国が手を挙げています。そして、北中米がアメリカとなります。メキシコははじめ手を挙げていたのですが、途中で撤退しました。現状として、10 の国とグループが手を挙げているという状況です。

2018 年と 2022 年を同時に決める招致なので、ほとんどのところが両方手を挙げています。その中でも例外なのが、韓国とカタール。そこは 2022 年だけ手を挙げるという絞り込みをやっています。

### <開催国決定プロセス>

開催国決定のプロセスは変わってきていて、かつては大陸の持ち回り制なんていう言葉もありました。今の FIFA のルールは、直近 2 大会を開催した国以外の地域から立候補を認めるということになっています。例えば、ヨーロッパでは、2006 年にドイツで開催しているので、2010 年、2014 年と 2 大会空けているからこそ今回手を挙げられるということです。2010 年に南アフリカで開催するアフリカは、2014 年と 2018 年は手を挙げられませんが、2022 年にはどこか手を挙げられたという状況です。

こうして見ていくと、2018 年だけでなく、さらにその先まで見えてきます。

皆さんのお手元にお配りした小さなカードは「JFA2005 年宣言」と言って、日本サッカー協会が中長期目標として掲げたものです。2050 年までにワールドカップを単独で開催して、そこで優勝するという目標を掲げています。2050 年というとずいぶん先に思われるかもしれませんが、このルールで行くとあまりチャンスはないんですね。例えば、2018 年か 2022 年に日本ではないアジアのどこかで開催になったとします。そこから 2 大会空けなければいけないので、最短で 2030 年か 3034 年。それを逃すと、またさらに 2 大会後。このように数えていくと今回を含めて 2050 年までにチャンスは 3 回しかありません。2002 年から、7~8 年しか経っていないじゃないか、もっと世界にチャンスをあげたらいいんじゃないかなど、世界からいろいろ言われます。ただ、日本としてこの限られたチャンスを最大限に活かさなければいけないという意味があるので、今回迷わず手を挙げたという 1 つの理由があります。

### <招致スケジュール>

資料に書かれているスケジュール上では既にいろいろなことが終わっているんですけど、今は提案書を出す最終作業をしている段階です。これは、5 月 14 日にチューリッヒの本部で直接ブラッターに渡すというメディア・アクティビティになる予定です。それが終わった段階で、各国が全て手の内を明かして提案を出しているのです。このような大会にしたいという PR を具体的に開始します。現地では FIFA 総会が行われ、そこでメディア・アクティビティのようなプレゼンテーションが行われます。

総会が終わると、インスペクション・グループが 10 の国に視察に行くこととなります。これは、1 つの国に 1 週間ずつくらい使ってしまうので、2 ヶ月半くらい使わないとすべ

てを回られないというタフなスケジュールになっています。その中で、日本は7月中だと想定されていますが、1週間くらいで視察グループにいろいろなところを見せるというプレゼンがあります。

あとは、最終プレゼンという形で、12月2日にFIFAの理事会で全て決定されます。FIFA理事24名の投票、もしくはそこでの議決で決定されるのですが、投票方法は決まっています。

### <招致活動のコンセプト>

ここからは、招致活動を日本としては、こういったコンセプトでやっていきたいかということをお話したいと思います。既に報道資料で発表している部分もあります。大きなところだけ掴んでいただければと思います。

まずワールドカップをもう1度開催することは、日本サッカー界の夢ですよね。前回は、開催したけれども単独ではなかったのが、コアである人ほど辛い思い出だったという人もいます。やれたはずのものがやれなかったということで、FIFAのメンバーで同情する人もいますが、そこが1つ力を入れているところですね。

もう1つは、なぜ日本でやるのかということですね。これは、オリンピックの時にも常に問われることですが、これはやっていて難しいところでもあります。例えば、今立候補している国の中で、まだ1回も開催していない国もあるんです。もっと言うと、オーストラリアはアジアだけれど、オセアニアで初という大義があったりします。なぜ日本でもう1回やらなければいけないのかというのは常に問われるところです。僕らは、そこに対するコンセプトをちゃんと作らなければいけなくて、そこに関して、まさに皆さんの意見をいただきたいと思っています。

他の国の招致では、オーストラリアでは“COME PLAY”というスローガンを出していたり、イングランドでは母国にぜひ帰ってきてくださいというスローガンを出しています。その点で、日本だからできるということをコンセプトとして整理しているところです。プロジェクト名称を「DREAM2018/2022」にしていたり、ヒューマニティーとテクノロジーが融合した象徴である「鉄腕アトム」を広報大使として、手塚プロに無償で使わせてもらっているということもあります。招致ロゴマークは、青いサッカーボールあるいは地球をモチーフにしたデザインで、我々のコンセプトを込めて、サッカーはもっと地球を1つにするし、もっと発展していくものだという思いを持ってプロモーションをやっています。

### <招致体制>

日本招致委員会というのが、1月6日に発表させていただいた日本の財界の著名人の方々やサッカーにゆかりのある方々を、日本を代表するの方々として入れた組織です。例えば、ユニクロの柳井さんや、トヨタ自動車の豊田章男さんが入っています。

はじめに、私は日本サッカー協会からの出向ということをお伝えしましたが、日本招致委員会と日本サッカー協会は別法人です。経緯としては、日本サッカー協会は財団法人ですが、FIFAとして、招致活動は別の事業体あるいは別会計の組織でやってくれという要求がありました。その条件に基づくと、別の法人を立ち上げなければいけなくなったということです。その中に理事会があって、自分の所属する実行本部も入っています。

その他、招致アンバサダーとして、サッカー界あるいはサッカー界の周辺の方々を外に出ていくPRの方々という位置づけになっています。

## II. ディスカッション

### 1. FIFA ワールドカップ招致活動をめぐって

#### <2018年、2022年開催国同時決定について>

中塚：なぜ2018年と2022年を同時に決めるようになったのかが分からないのですが。

五香：それはFIFAも公表していません。今までは2002年のワールドカップを1996年に決めたように、ワールドカップを6年前に決めていたんです。しかし、6年前に1大会だけを決めると、決まった後に開催国が安心してしまう。「やった！決まった！」で2年くらい過ぎて、もうそろそろコンフェデだということで、やっと準備が始まるということの問題視しているというのが想定される理屈なんです。2大会を同時に決めると、1大会前を見て自分たちも準備ができるということかもしれません。

井上：今の件についてコメントなんです。2大会同時に決めるということは既にラグビーでやっています。2015年と2019年をセットで決めるというやり方をしています。これに対して、UEFAでは危機感を感じておりまして、ヨーロッパだけを見ると、視聴率などでラグビーに抜かれてしまっていて、UEFAは欧州選手権などに対して、どうしていくかをすごく考えています。ラグビーは、基本的にはヨーロッパ5ヶ国と南半球3ヶ国の大会です。サッカーのワールドカップですとグループリーグは2試合同時にキックオフ、そして平日の昼間のゲームもありますが、ラグビーは人気チームの試合はゴールデンアワー、グループリーグの最終節も別々の時間にキックオフするなどして、視聴率や観客動員数が増加しています。

中塚：ラグビーが2大会同時に決定するようになったのは今回からですね。

井上：今回からです。

参加者：ラグビーが2大会同時に決めるというのにはどういう意図があるんですか？

井上：前回大会で運営に携わった人間が、次の大会にそのまま来るらしいですよ。FIFAワールドカップだと、有名なものが、1994年のアメリカ大会では1990年イタリア大会のスタッフがずいぶんアメリカに渡ってきているらしいですね。

参加者：それと2大会同時に決めるというのは直結するんですか？

井上：2大会セットで運営していこうと考えているんじゃないですか。2018年にはこういうシナリオで、2022年にはこういうシナリオと、4年スパンくらいでプログラミングしているんじゃないですか。

牛木：エージェントにとって、広告料のほうも、当面の2大会を押さえられるということがありますね。昔の系統で言いますと、FIFAはISLの系統なんですね。ラグビー

はウェストナリーの系統です。これが争っているというところがあるんじゃないかと、今の話をお聞きして思いました。

五香：それはうなずけるところがありますね。安定して8年契約を結ぶるところはあるのかもしれませんが。プロモーション的に考えると、今は招致ラッシュですけど、2大会同時に決めていくと、ちょっと経つと期間が大幅に空くんですよ。だから、定期的に行っていた招致活動がブツ切りになっていく可能性はあるかと思います。スポンサーが安定して確保できるという点ではいいかと思いますけど。

白髭：ラグビーの場合は、IRBが、昔は英国4協会とフランスと南半球の3ヶ国しか相手にしていないみたいな状態で、1回ずつ決めると、その中でたらい回しにするだけで、新しいところが全然できないと。IRBとしてはアジアでもラグビーを普及させたいので、2大会同時に決めれば、片方は旧宗主国でももう片方はアジアだとか、新しいマーケットが開拓できるという政策があるんじゃないかという話を聞いたことがあります。前回日本が招致に負けた時に、森さん（森喜朗：日本ラグビー協会会長）が「なんだ、たらい回しにしているだけじゃないか」と言ったという話があるんですけども、新しいマーケット開拓のために行っているという話があります。

嶋崎：ラグビーの場合は、今のが正解です。IRB8カ国だけで開催していたものを、普及の観点から他のところに出したい。ただし、1ヶ国ずつ決めていくと絶対に8ヶ国の中のどこかが取ってしまうので、2大会セットにすれば1つは他所に振れるというのが、ラグビーのワールドカップ2大会同時決定にした理由です。その裏には、牛木さんがおっしゃったエージェントの問題はあると思いますが。

白髭：ラグビーの場合は括りが厳しいですよ。上納金収めろだとか。日本にとってはすごい厳しいと思いますね。

ところで、小倉さん（小倉純二：FIFA 理事）は今年で定年なんですか？ 投票する時はまだいらっしゃるんですか？

五香：2011年に全て改選になるので、その時は定年になってしまいますが、投票の時には票を持っています。70歳がJFA副会長としての定年という理由です。

参加者：田嶋さん（田嶋幸三：JFA 専務理事）がその後釜だという話をもうしていますけど。

五香：この前理事会で承認されたということで、メディアには発表しました。

白髭：しかし、実際立つかどうか分からないと本人は言っているらしいんですけどね。

## <東京オリンピック招致失敗、ラグビーワールドカップ招致成功の影響>

中塚：ラグビーの招致もあったけど、東京のオリンピック招致活動もありました。メディアからの情報でしかないんですけど、当初、FIFAワールドカップに立候補するにあたって、2016年の東京オリンピック誘致は前提だといった報道がなされていたよ

うに思うのですが、東京オリンピック開催がなくなった今、コンセプトの切り替えみたいなのはあるんですか？

五香：東京オリンピックが来たら 10 万人のスタジアムが建つことが見えていたので、これは我々にとっても喉から手が出るほど欲しいものではありません。仮に負けたらどうするかという話はしたくなかったんですよ。オリンピックを応援しているサッカー界の立場として、負けてもこうですよというのは言いたくなかったというのがずっとあり、オリンピックが来たら我々にとっても当然追い風になるということを言っていました。言い方によっては、それありきだという形でメディアに出ちゃったこともあったかもしれませんね。それはネガティブに作用している。特に海外メディアには、やる気ないんじゃないかとサッカー界が言われたこともありました。

牛木：僕は犬飼さん（犬飼基昭：JFA 会長）の発言はよくなかったと思っています。あの報道を新聞で見た時に感じたのは、東京オリンピックを応援するために犬飼さんがああいうことを言っちゃったのだということです。東京オリンピックで 10 万人のスタジアムを作った後、何も使わないのかという批判が当然出ている訳ですから。サッカーでも使います、サッカーにも必要ですと言えば、東京オリンピックに対して応援になるという政治的な配慮からああいう発言をしたのではないかと、僕は当時思いました。その後だいぶメディアに叩かれたので、修正しましたね。

中塚：その点、東京オリンピックの招致活動に携わっていた方としてはいかがですか？

相原：僕らの理解では、犬飼さんが失言したとは思ってなくて、基本的にはおっしゃる通りです。東京オリンピックが来たらサッカー協会も応援しますということを表明された訳ですから、それはトップとして言うことだと思うんですね。実際、僕はクリッピングを担当していましたが、日本の報道ではそんなにネガティブなものではなくて、あとは IOC 系のメディアを全部見させていただいていますけれども、そこにはネガティブな反応は全くなかったもので、逆にこう言った意見が初めての意見です。

牛木：ネガティブというのは、オリンピックが招致できなかつたらワールドカップは招致しないのか、というサッカー界内でのネガティブな反応ですよ。

相原：そこについても、そんなことはないと言っていますよ。ただ、それがうまく伝わらなかったのは、叩く人もいなかったもので、サッカー協会としてカウンターを打つ必要もなくて、そのまま流れちゃったんじゃないかな。

嶋崎：今のところと関係あることとして、ラグビーではワールドカップが取れたので、サッカーの招致活動について応援しますという声明を出しましょうという動きがラグビー協会の中では出ていますし、おそらくそうなるでしょう。フットボールの仲間としては、そうあるべきだという議論になっているようです。

参加者：ラグビーワールドカップは 2019 年ですよ。1 年おきというのは大丈夫ですか？

嶋崎：そんなことは、たぶん考えていないと思います。

五香：いや、当然そういった議論はありまして、2018年にやるとお腹いっぱいになっちゃいますよね。2022年の方が、2019年にラグビーワールドカップやって、コンフェデをやって、2022年にワールドカップをやるというのは悪くないなという意見が出てはいます。

### <投票にあたっての駆け引き>

高田：2018年と2022年で、今の状況ではカードを絞る必要はないと言いながら、招致委員会としては確率的に2022年の方がいいというような話はあるんですか？

五香：確率的には2022年の方が高いですよ。2018年はヨーロッパに行くだろうというのが大方の見方です。投票方法が決まっていないので、ここは本当に様子を見ながらなんですよ。

白髭：IOCみたいに、立候補している国は投票権なし、みたいなこともあるかもしれませんよね。

五香：あり得るんですが、ただ24名ですから、数えるとほとんどの人が手を挙げられなくなってしまう、それが世界の意思なのかということにもなってしまいますからね。

参加者：前はどのようなやり方で選挙をしたんですか？

五香：前は完全に合議制ですね。投票する予定だったのが、いろいろな政治的な絡みの中で、先にアベランジェが日韓共催すると提案し、異議なしということで決まっちゃったんです。

参加者：南アフリカが決まった時はいかがでしたか？ 紙に書いたんですか？ それともボタンですか？

五香：たぶんボタンだと思います。今は全部エレクトリック・ボートティングシステムでやっているのです。

参加者：オリンピックでは最初何票入って、2回目何票入ったと最後公表するじゃないですか。そういうノックアウトではなくて、一発で決めちゃうんですか？

五香：分からないですね。一斉にやると、24票が例えば4つくらいにばらける訳ですよ。そうすると、5票取ったら勝ちか？ それを良しとするのか？ こういう議論も出てくると思います。

参加者：そうするとノックアウト制が。

五香：そうなるかもしれないです。



## < 招致委員会の組織構成 >

相原：ちなみに今の招致委員会の組織って、中ではどうなっているんですか？ 僕ら（東京オリンピック／パラリンピック招致委員会）の場合だと、国内事業部門と国際部門と分かれていたんですが。あと、何名くらいいらっしゃるんですか？

五香：今は 16 名くらいですかね。オフィスが JFA ハウスの中でありまして、そこに僕もいて、16 名デスクがあるんですが、混合チームなので、純 JFA スタッフというのは 4 人しかいないです。あとは、プロジェクトごとに、パートナーシップを結んでいる人たちがそこに来て、一緒にワークしているという状態です。例えば、招致ブックを作りますという、編集スタッフがいて、一緒にやらないと出来ないの。

参加者：その中には JAWOC にいた人もいますか？

五香：JFA のスタッフのうち、僕も含めて 2 人は JAWOC 出身ですね。あとはベニューで運営のアシスタントをやったりと、何かしらワールドカップには関わっていました。ただ今回のメンバーは圧倒的に若いんですよ。僕もまだ 33 ですし、メンバーが 4 人とも 30 代ですね。実際に現場でやれるやれないというレベルでいくと、僕なんかもたまたま英語が話せたりするので選ばれているんだと思うんですけど、JFA という組織の中では十分な国際経験を積んだメンバーですし、なかなかフレッシュなメンバーです。

## < 8 万人スタジアムについて >

白髭：開幕戦と決勝戦の 8 万人スタジアムというのは、今組織委員会では、大阪で建ててくれそうだとすることを楽観視しているんですか？ それが建たないと、前提として絶対だめですよ。

五香：楽観視しているかと言えば、していないんですけど、悲観してもしようがないという状況ですかね。

## 2. なぜ、いま、日本で FIFA ワールドカップなのか？

### < “WHY JAPAN？” “WHY WORLD CUP？” >

中塚：たぶん一番議論したいところは、“WHY JAPAN？”というあたりですかね。そのあたりで何か補足説明だとか、何かここで皆からこういうところについて聞きたいといったことがあればお話しください。

五香：補足説明させていただくと、“WHY JAPAN？”というのをどう整理するかというと、整理はするんですけど、ターゲットによって出し方が変わってくるものになっていると思っています。

中塚：招致委員会は、「招致のためにどうするか」ということを考えるのですが、一般の人たちからすると、実はその部分はよく分からなくてもよくて、「オリンピックは何のためにやるの？ ワールドカップは何のためにやるの？」というところを、もっともっと一般の人を巻き込んで大きなムーブメントにしていかないと、本当は良くないんじゃないかなという気がするんです。

2002年の時はどうだったかという、むしろそっちの方がすごく分かりやすかった。プロのサッカーリーグが出来て、ワールドカップ招致とは車の両輪であるという言い方をしていましたよね。サッカーをこの国の文化にしていこうという、大きなプロジェクトとして見えていたんだけど、その部分が見えないまま、招致のテクニックみたいところが先行しているような気がして、もどかしいんですよね。

どういったワールドカップにしていっていいのかということをごここで議論できたらいいと思います。

五香：サッカー界に精通している方が多いこの場だから、テクニカルな部分を強調して言っているところはありますね。

井上：今の中塚さんの話からいくと、世界のサッカー界の人に対しては“WHY JAPAN？”という話だと思うんですけども、前回のオリンピック招致の時に話題になったんですが、“WHY WORLD CUP？”ということもあると思うんですよね。日本人が「ワールドカップすごかったね、もう1回やりたいね」と思うのは当たり前かもしれませんが、逆に「またサッカーのワールドカップが来るの？」という反応もあるわけで、そこも1つあるのではないかと思います。2002年のワールドカップを呼んだ時と同じようなムーブメントを作っていかなければいけないと思うんですよね。そこはどうなんでしょうか？

五香：限られたバジェットの中でどうやっていくかという僕らの戦略ではあるんですよね。オリンピックとちょっと違うのが、国内での支持率というものが評価の基準には入っていないので、そこは投票行動という意味では必ずしも必須ではないと。

牛木：招致をするためにはそういうことが必要かもしれないけれども、先ほど中塚さんが言っていたことはむしろ“WHY WORLD CUP？”で、本当に招致する必要があるのというところから始まらなくちゃいけないということですよ。中塚さんが言っていたことは、ワールドカップを招致することを招致する側がどう思っているのというところですね。

五香：今後40年くらいを見た時にかなりチャンスだという位置づけでは考えています。だから、チャンスだから絶対にやらなければいけないというのが、“WHY WORLD CUP？”の答えになっているのかというのは難しいんですが。

牛木：それはなっていないですよ。だって、やることが良いことだということが前提になっての話だから。「日本に本当にワールドカップは必要なんですか？」「やらなくてもいいんじゃないですか？」という考えもあることを前提に、国民に説得力ある説明ができるかどうかという問題なんですから。オリンピックは良いものだという前提が

あって招致活動をやっている。ワールドカップはいいものだという前提があって招致活動をやっている。けど本当ですかという疑問もある訳です。僕は、オリンピックはいらないが、ワールドカップはやった方がいいという意見なんだけれども、それでもなぜワールドカップをやる必要があるのかという説明は、国民の1人として聞きたい。

## <インフラ整備のために？>

五香：まず、日本国内、特にサッカーファミリーに対してこれはやるべきだという理由でいくと、スポーツインフラが整備されるという点では絶対にいいということが言えます。オリンピックと違うのは、1都市集中ではないので、日本全国でベニューを分けてやります。キャンプ地が64以上ある中で、2002年からそこで得た利益を使って、フットボールセンターを作ったりだとかしているものを、今ようやくキャンプ地として使えるような状況になってきている。1つ例を挙げると、中津江村のようなところでさえも「サッカーってすばらしいね」「日本が元気になるよね」と言うのは、間違いなく日本のスポーツ界にとって良いことだと思っています。だから、サッカー界の人間としてやるべきだということは絶対に言えますね。それが一日本国民になった時に、必ずしも今じゃなくちゃだめかと言われれば違う理由になってくるかもしれないです。別にスポーツをそんなに盛り上げなくていいという人がいたら、それはやんなくていいんじゃないですかということになってしまいますね。

井上：今の日本人にとっては、ワールドカップよりもWBCの決勝トーナメントの招致だと思います。WBCの決勝戦を東京ドームでやってくれないかなというような人たちに対して、そうじゃなくてこっちですよと言えることが国内向けには必要なんじゃないかと思うんですけどね。

名方：僕、素人で聞いていてすばらしいなと思ったんですよ。どうしてかという、ものすごくグローバルじゃないですか。理事もちゃんと日本人が出ていると。今日本の問題というのは、本当に鎖国みたいな感じで、世界で活躍するビジネスといのは本当に限られているんです。グローバルだと言いながらも、まだまだ日本の社会だけで利権がどうのこうのってやっているでしょ。サッカーをやることで、世界に開かれているという意味ではいいなと思います。ラグビーは、やっぱり限られちゃうんですよ。サッカーは、それに比べて大きいですよ。

参加者：ただね、Jのクラブなんか潰れるかもしれないという話の中で、本当に呼びたいと思っているのかどうか分からないなど。たぶん、大阪でと言っても、今あれだけいろいろなものを潰して、公共施設を手放している中でやるとなったら、よっぽどの何かがないとできないんじゃないかという気もするんですよ。土地はあるかもしれないけど。

五香：1つ目のところが良く分からなかったのですが、例えば大分のJのクラブが潰れそうになっている中で、なぜお金をかけるのかということですか？

参加者：そういうサッカー文化がまだ育っていない中で、ワールドカップを呼んできた

らそういうことが解消されるのかどうか。Jに上がりたいんだけど、お金がなくてできないというところもいっぱいある訳でしょ。だからその辺どうなのかなと。

五香：サッカー界にとっては絶対に起爆剤にはなりますよね。そうなっていないからこそ、もっと盛り上げなければいけないという意味では、ワールドカップはとても価値があると思います。

参加者：ただ、それに対して施設だとかいろいろお金をかける訳じゃない？ それに対してはどうなのかということがよく分からないんだけど。

五香：それ以上に見返りがあるかということですよ。

牛木：僕の考えでは、インフラを整備できるから大会をやろうというのは、オリンピックの時にもあったけど、少なくともワールドカップについては逆立ちしている考え方です。インフラがあるからワールドカップをやろうというのが普通なんです。オリンピックのために、あるいは、ワールドカップのためにインフラを作ろうっていうんじゃなくて、「日本にはインフラがあるからワールドカップ呼ぼうじゃないですか」「良い試合見られますよ」「楽しいお祭りができますよ」「日本国民楽しめますよ」というのが、国内に対する説得力でなければならない。世界に対する説得力というか、実際には24人のFIFA理事に対する説得力になるのは、日本はインフラもあって、運営能力もあって、「だから日本でやりなさいよ」「やらせてあげますよ」「うちが1番やりやすいですよ」というのが本来だと思うんです。インフラを作るためにやるというのは、日本のスポーツ界にとってもよくないし、FIFAにとっても今からインフラ作るんだったら韓国でやった方がいいということも言える訳ですよ。

井上：歴史的に見ても過去2回ワールドカップを開催したスタジアムは非常に少ないんですよ。1990年のイタリア大会の時には、1934年大会で使われたスタジアムは1個も使っていませんでした。1998年のフランス大会で、ボルドーのシャパンデルマスがはじめて2回目のワールドカップをやったスタジアムとして話題になりました。

牛木：その説明はおかしい。前のワールドカップのスタジアムは古くなっているので使えないのも多いんですよ。だけど、イタリアのワールドカップで新しく作ったのは非常に少ないですね。イタリアのワールドカップはどんなスタジアムの大会だったかという、屋根を作る競争だったんですね。そういうふうな点で新しくしなくちゃいけないということはあるんですけど、前に開催した時も使ったという話ではない。今国民たちが使っているようなスタジアムを活用してやろうじゃないかということじゃなくちゃいけない。それで足りないものはもちろん作った方がいい。

井上：ちなみにフランス大会の時にスタッド・ド・フランスという新しいスタジアムを作ったんですけど、ワールドカップのために作られたスタジアムとしては何年かぶりに作られたスタジアムなんですよ。1986年のメキシコ、1982年のスペインと、ワールドカップのためのスタジアムは作られてないんですよ。1994年のアメリカもそうですけど。イタリアにしる、スペインにしる、何十年ぶりの間にインフラが整備されていて、そのような整備されている国でやるというのが今後の新たな流れかもし

れません。今までの流れとして、オリンピックが発展途上国から先進国になる通過儀礼として成人式のように言われました。もう1つの流れとしては、成熟した国や都市の還暦祝いのようにスポーツイベントが開かれるようになると思います。リオデジャネイロは成人式ですけどね。

## < 純粋な楽しみのために？ >

高田：なぜ日本かという話で、例えば協会の犬飼会長たちが現役でバリバリやっているうちに、俺が2度目のワールドカップを持ってきたんだという功績を残したいというような、僕は悪い意味で言っているのではなくて、例えばもし僕が同じような立場で、今は中国がいないだとか、小倉さんがいらっしゃるというチャンスがあって、組織の上に立っていて、嫌らしい言い方だけれども、だめ会長と言われながらも俺は持ってきたぞという権力を誇示する結果を残せると。もっと言うと、そういう権力の上にいる人たちも、結局はワールドカップって理屈抜きにおもしろいんだと。実際2002年を経験して、半分しかやれなかったとしてもすごくおもしろくて、サッカー見えるようになったとか、中津江村がああいう風になったということで、少なくとも元気を与えたというのは間違いない。純粋に言うと、もう1回やりたいたけなんだと。2002年をもう1度思い出してみよう。私の奥さんも、サッカーまったく知らないところから、山一証券に務めて、ワールドカップのカードを1000円で買ってくれと言われて、僕にまで売りに来た。そういうことがそこら中で起きていた訳ですよ。個人的には非常に楽しい大会だったと思うんですが、あれが韓国でやってなくて、もし全部日本でやっていたらすごかったんじゃないか。あの倍の経験ができるんだという。そこら辺をもう少し分かりやすく、表現できないのかなって。犬飼さんや田嶋さんが功績を残したいという前提には、やっぱり純粋に楽しかった、良かった。2002年が良かった。海外の他の国もあのワールドカップを見て純粋に良かったと思える部分は絶対にあると思うんですよ。それを、純粋にもう1度思い出しましょう。前回は“FIRST IN ASIA”だったら“REMEMBER 2002”だとか、あの時って楽しかったよね。それをもっと日本の良さを出してやろうというところが入ると、日本の一般国民もそうだなと。今はサッカー、Jリーグおもしろくないから見ないけど、2002年の前はよく見ていたなとか。2002年盛り上がり、はじめてサッカー見たのがワールドカップのカメルーンとどっかだったとか。そういう人たちも実はいる訳ですよ。そういう人たちも楽しかったというのがワールドカップだったと思うので、その辺の純粋な記憶も乗せると、素人にも訴えやすいと。あの時は半分だったけど今回は1国で開催して、厳しい中でも、今ある施設を活用すればキャンプ地でも何でもできると思うんですよ。そういう形でやれば、我々1国でも、こういう厳しい状況でもできるぞと。ワールドカップにはバンバンお金使って、かたやJリーグ潰れるというのは、サッカーに関わっている人だと避けて通れない話だと思うんですよ。だから、ロジックや戦力だけでなく、その辺も含めてちょっと入ってくると一般人としておもしろいんじゃないかなと。

## < ワールドカップとインフラ整備 >

中塚：ワールドカップそのものが、アメリカでやったり日本でやったり南アフリカでやるようになって、もともとあった「サッカー大国でないといけない」「サッカー大国だからこそ開ける」というシンボルからちょっとずつ変わってきたのかなという気も

しています。そういう面で言うと、本来インフラがしっかり整っていて、そこを支えるボランティアも、日常的にクラブで活動している人たちがやりますよというのとは違ってきている。日常的にスポーツがあって、日常にサッカーがある人たちが、Jリーグや JFL の行きつく先にワールドカップがあってというのが 1990 年までのワールドカップですが、そこから先のワールドカップは、むしろワールドカップをきっかけにしてサッカーファンを増やしていこうだとか、ワールドカップをきっかけにしてスタジアムを作っていこうという風なのを受け入れ出したなど。我々はそういうところにいるのかなという気がしています。

先ほど牛木さんがおっしゃられたことにはまったく同感なのですが、残念ながらまだ日本という国は、特にスポーツの分野において、何かきっかけがないと予算がつかない。国体であったりインターハイであったり、ワールドカップであったり。逆にこういうのがあると、大阪ですら予算が付く可能性があるんじゃないかなど。そういう風に使えるところをうまく活用してやっていくしかないのかなという気がしました。本来とはちょっと違うんですけどね。

牛木：ワールドカップをやって、スタジアムを作ったり、お金が動いたりする効果はもちろんあります。だけど、それを表に出して、だからワールドカップをやろうと言ったら国民が納得するかと言ったらそれは納得しないと思いますよ。ワールドカップを開けば、あなたたちも楽しめますよ、しかもそんなにお金かからないですよ、というのなら説得力がある。オリンピックであんなに狭いところに大きなスタジアムを作っても後に使い道がない。インフラ作るためにやるんだっていうんだったら、俺は 10 万人のスタジアムはいらないよと思うよね。

参加者：ワールドカップのためにインフラは作らないですよ。唯一作りそうになったのが大阪で、だけどそれは国じゃなくて大阪の分である土地が。

牛木：それはそうですよ。だけど、五香さんがインフラを作るのに役立つからワールドカップだとおっしゃったから、それに対して反論しただけです。実際には作らないで済みますよということの方を PR の材料にしないと。少なくとも国民に対しては。

五香：だから、それは一般国民に対して言うことではないですね。でもサッカー界の人に対して言うと、もっと良くなるというのは目に見えているじゃないですか。芝生も増えるだろうし。それが、インフラなのかサッカー環境なのか分からないですけど、スポーツ環境は絶対に良くなるということは言うべきだと僕は思います。

牛木：それはまったくそうで。大会が実際に行われるようになった時もスポーツ環境はこういう風に良くなるんだと。単に大きな 10 万人のスタジアムを作って、後はペンペン草が生えるんじゃないんだと。それを説明できるような準備の仕方を考える必要があって、それはオリンピックの場合も、ワールドカップの場合も見えていない。ラグビーの場合も見えていない。ラグビーのワールドカップをやって、それがラグビーに、あるいは日本のスポーツ全体にどういうふうに役に立つように準備するんだという具体的な話は見えていないですよ。それはこの機会に見えるようにしなくちゃいけない。

五香：それを見せるということが勝っても負けてもやるべきだということの1つですよ  
ね。それが招致をすることの価値ということですよ。

井上：仮に失敗してもそういうものが全国に何らかの形で残るといことなんですよ。

### <日本社会の活性化のために？>

名方：今スポーツだけに限ってはいまですけど、もう少し大きく日本活性化のためにやるん  
だという位置づけがいいのかなと思うんですよ。

五香：政府に対してや、企業に対してはそういう言い方をしています。

名方：将来についてどうかと言え、これから40年後の2050年までに15歳から64歳  
までの生産人口は4,100万人減るんですよ。スペインとほぼ同じ人口がいなくなっ  
ちゃうんですよ。ですから、その先ほとんど厳しいだろうと。だったら今回が最後の  
チャンスかもしれない。去年たまたま個人的にバロセロナに行って、キャンプを見て  
きました。奥さんや娘も一緒にいて、何でそんなところ行くのと言っているけど、実  
際に見たら、観客の応援の雰囲気だとかがすごいと。日本にないんですよ。そうい  
うものが見えるということは良いことなんです。勉強だけして大企業に入っても、ど  
こかの会社のように危なくなるんだから。そうじゃなくて、いろんな生き方があるす  
よと。スポーツで生きられるんだという選択肢が生まれれば、スポーツってすばらし  
いな、サッカーってすごいなということで国民をチアアップするには非常にいいん  
じゃないかと。

### <日本サッカーの競技力向上ーワールドカップ優勝のために？>

白髭：あんまり海外には向けた話ではないんですが、岡田さんが今度ベスト4に入ると  
言っているけど、日本でもし2018年か2022年にやればホームだし、前回日韓の時  
に韓国はベスト4に入ったんですけど、日本にもベスト4になるチャンスはあるよと。  
高温多湿だし。代表を強化することをもう少しやらないと。今は代表の試合でもタイ  
トルがかからないと全然お客さんが入らないことかあるので、もうちょっとパワー  
アップしないと。いくら大会を持ってきても、日本が1次リーグで負けちゃうとだめな  
ので。

井上：チャンスというのは、開催のチャンスではなく、優勝のチャンスですよ。

五香：両方ですね。

井上：開催できるチャンスは2018年か2022年か2030年しかない。2050年までに優  
勝すると言っているんだったら、優勝するチャンスというのは圧倒的にホームだよ。  
そうすると、優勝するためにホームでやらせてくださいということ国民に語りかけ  
るべきなんじゃないですかね。先ほどWBCの例を出しましたが、あれって優勝し  
たからですよ。優勝しなかったら、「アメリカが何かやっているね」という大会で  
終わっちゃっていますけど。勝ったことに意味があったような大会だと思うんですよ。

ね。WBCを通じて大化けした選手もいないし。はっきり言ってWBCでマイナスになった選手も多い訳ですよ。けども、国民があれだけ熱狂できたのは優勝できたからですよ。

牛木：代表チームの強化と招致問題を結び付けると、いろいろ具合の悪いこともありますよ。代表チームが優勝するために集中して強化することの弊害というのもあるんですよ。例えば、1964年の東京オリンピックの時に、4年間ほとんどオリンピックのために強化をして、それが実ったのはメキシコ・オリンピックの銅メダルなんだけど、メキシコの後は焼け野原みたいになっちゃった。釜本にもう4年やってくれと言って無理に残さなければならぬほどだった。そういう弊害もあるから、1つの大会を目標に集中的に強化するということと日常的なレベルアップを図るということとは必ずしも両立しない。日本でやる以上は強くならなくちゃいけないんだけど、あまりに日本のサッカーを強くするためには大会をやった方がいいということを表に出して言うのは、他の国の人から見たら自分勝手だし、日本人にとってもそんなに良いことではないと僕は思いますね。

参加者：やっぱり自分の国だけでなくいろいろな国のサッカーが見られると。今ナショナルリズミ的なことが強すぎて、いろいろな国のサッカーが見られるという楽しさ、それがワールドカップの場合は、オリンピックと違ってキャンプからいろいろな場所に散らばるじゃない。だからそういう意味でも、いろいろなサッカーがおもしろいんだということをどう感じさせるかということが内向きでは必要じゃないかと思えますね。

## <2002年の記憶－ワールドカップは楽しい！>

牛木：東京以外のあまりサッカーが盛んでない地方では、2002年の時には楽しんだんですよ。テレビを通じて楽しんでいるし、町歩いたら外国人も歩いているということで楽しんだのです。僕は今まだ2002年が忘れられていない今のタイミングだったら、そういう意味では支持されると思いますね。代表チームを強くするためにとか、大きなスタジアムを作るためにというのは支持されないと思うけど。

高田：地方は本当にそういうところがありますよね。奈良県の橿原市では、パラグアイとチュニジアがキャンプをやっていて、本当にきれいな芝生のグラウンドが2面くらいあるんですよ。それで、試合が見れるような会場があって、元々芝生のグラウンドだったんだけど、そのタイミングで整備してキャンプに呼んでと。人口もそんなに大した数ではないんだけど、そこに来ることによってものすごくサッカーに関わる人たちが増えたと。「子どもがサッカーやっているからキャンプ地で何か掃除でもしようか」とか、そこらの民宿みたいところに泊まってトレーニングをやっている。触れ合う場がある。そこでは、その会場を少年サッカー大会、シニアサッカー大会などに有効活用している。東京と違って芝を開放してやっている。それはワールドカップが来たおかげだと、その地域の人は皆言っています。年に1回そこに遠征に行っているんですけど、何で奈良の田舎にこんな設備があるんですかって聞くと、ワールドカップがあったおかげですっていうのが、子どもを送り迎えしているおばちゃんもチームの監督さんも地域の協会の人もおっしゃっています。東京にいるとそういうこ



とは感じられなかったんですけど。そうことが全国で起きるんですよ。「純粋におもしろいサッカーが見れる」「他の国の人と触れ合える」ってことをうまく表現できると良いと思うんですよ。だから、招致委員会の実働部隊の人でうまくそういうことに手をかけられる人がいるといいんだけど。

僕はプロジェクト・マネジメントの仕事をやっているんですが、僕だったらどうするかと考えると、そういうシナリオを作って、国民に対してはそういった純粋な楽しさを理解させる。それで、強化の部分で絶対話が出てくるので、2018年か2022年にやると決まったら、その時に代表になるユース年代の育成をどうしていくかということを経済委員会の方たちはもっと真剣に考えると思うんですよ。ドイツでやったゴールドプランのように、日本のやり方があると思う。4年間だけを見て東京オリンピックで失敗しているんだったら、谷間を作らない形で後ろもずっとやっていく。結局、強化や育成のところワールドカップはものすごく波及効果があるんじゃないかなと思いますね。前回トルシエがやった後バタバタしたことに対する反省はされていると思うので、強化も含めてサッカー関係者に伝わればいいかなと思いますね。

井上：2002年のワールドカップは楽しかったと国民は思っていると思います。実は、2002年に決勝で戦ったブラジルとドイツは、1996年5月に共同開催が決まった段階の世界ランキングの1位と2位だったんです。そんなケースって過去3大会ない。前回のイタリアとフランスは3位と7位。そういう点でいくと、招致の時に強かったチームが6年経って、決勝で相まみえたというのはすごい話です。ドイツとブラジルが本大会で戦ったのは初めてということもありますしね。

### 3. 今後、どのようにアピールしていくか？

#### <海外メディアへのアピールと評価>

牛木：招致するにあたって国際的にはどうなんですか？

五香：国内的なところでは、皆さんの思いがとても参考になりました。国際的には、24人の理事に対する部分と海外メディアにどうアピールするかという部分ですね。海外メディアは、僕らもなかなか普段の接点がないですから、この前ドローの時に、ケープタウンでメディア・アクティビティーということをやったんですね。そこで何100枚という名刺を集めて、その人たちにメールを発信しようということは、今やろうとしています。インタビューとかは、電話インタビューがほとんどですが、バンバン来ることがあるので、僕が受けて直接書いてもらうということをやっています。

参加者：海外メディアにはJR乗り放題切符をあげるとか、そういうのがいいですよ。ドイツワールドカップの時は、僕は全部もらいましたから。

牛木：先ほど、日本は2002年の時にホスピタリティーに対する評判が良かったというお話がありましたけど、実は我々の感じはそうじゃないんです。非常に評判の悪い大会なんです。特に日本の場合は韓国に比べて盛り上がりがない。JAWOCは官僚的であ

る。メディアセンターは各国の大会で1番お粗末というのが我々メディアの評価でした。僕はワールドカップを10回取材していますが、僕自身の感じも、10回の中で1番悪い大会だった。これは必ずしもJAWOCだけの責任じゃなくて、切符の処理などはパイロンがめちゃくちゃやった尻拭いをしなければならなかったということもある。でも、非難はパイロンに行くんじゃないでなくてJAWOCに行くということがあるから、必ずしもJAWOCだけの責任ではないんだけど。僕が関係した新潟では、駅からスタジアムが遠いから途中でたくさんビールを飲めるようにしようと言ったら、警察が、当日は競技場に行く途中の飲食店は全部閉めるようにという行政指導をした。そういうことは、他の国がどのようにワールドカップをやっているかということを知らないでやった訳ですよ。だから、彼らはコンビニでビールを買い占めたけど、これがワールドカップかという感じなんです。そういうように、必ずしも評判は良くなかったんだということを知らない人たちが、評判が良いんだというお世辞だけを真に受けて準備されていると、これは心配だなという感じがしています。

五香：僕らは、実際良くなかったんだということを言えばいいですか？（笑）

牛木：僕の友達でJAWOCで働いているのもたくさんいるけど、反省はしているんだけどその反省が活かされていないんじゃないかと。先ほどの、評判が良いという話を聞いて、反省が活かされていないなということを非常に心配しました。

高田：一般人の評価とメディアの評価もまた違いますよね。

参加者：中に入れなくてもドイツに行って面白かったという話は聞くけれど、果たして日本にはそういう文化があるか。

牛木：これは開催が決まった後の話になってくる訳だけどね。

参加者：日本は安全という面ではいいですよ。

## <投票予測>

牛木：24票の見通しはどうなんですか。

五香：僕らの日本サッカー協会としての付き合いを見ていただくと、親善試合をやる南米の国が多かったりということがあるじゃないですか。アフリカとの付き合いもありますし。手を挙げていない大陸ですから、その辺がどういにかということと、今まで培った関係をもう1度固めるということが最優先にやらなければいけないことだと思っています。

牛木：アジアから2ヶ国選ばれることはない中で、韓国と日本が手を挙げている影響というのはいかがですか？

五香：アジアがまとまることはないだろうというのが大方の見方ですね。アジアは、それぞれがそれぞれの動きを他の大陸にしていくという見方ですね。

牛木：ヨーロッパが先に決まると、次がアジアという可能性は非常に高いんですよ。

五香：アメリカかアジアですね。

牛木：そうすると、アジアの中でどこか選ばれるかということになりますよね。見通しはどうですか？

五香：差別化を図りますけど、ネガティブキャンペーンはやるなという FIFA のきつい指導もあるので、前回の日韓の招致のように、お互いがお互いを消しあうということはないんですよ。海外のメディアでは、2022 年はアメリカかオーストラリアか日本という論調が多いですね。

牛木：日本に対する評価というのは、施設とか運営能力とか安全とか、客観的に運営するためのことを見ると有力なんですよ。政治的なものは日本は欠けているからね。

五香：FIFA は日本をバックアップ国としてキープしておきたいと言っていますね。日本なら 1 年前に決まっても運営できちゃいますから。後は、2018 年がヨーロッパに決まれば、彼らは 2022 年は票をどこかに入れる訳ですから、ヨーロッパ票をどう取るかですよ。

### < 招致予算とその使い道 >

名方：予算はどのくらいあるんですか。

五香：予算は、今 10 億円弱を見込んでいます。日本協会から 5 億円。一方、他の招致国の平均予算が、20~30 億円と言われてます。2002 年の招致の時は 90 億円弱で収支報告しているのと、東京オリンピックは 150 億くらいといったところですね。

参加者：僕は来年 J リーグのチームから 1% 上前をはねるというのを心配しているんです。ごく一部のクラブを除いて、J リーグは厳しいじゃないですか。

五香：前回の時は、チケットにいくらか乗せて売ったんですよ。あれは、もともと 3% なのを、景気が良くない中で 2% にしていた暫定処置ではあったんですけど。

牛木：東京オリンピックの招致に比べれば非常に少ない予算ですね。

五香：予算はコンパクトです。

牛木：それで、鉄腕アトムは無料で提供されるんですよ。これは大きいですよ。東京オリンピックでは、僕らの仲間の講演料なんかも非常に高かったもんですね。建値でほとんど払われている。あんなにお金を使うことはないんですよ。ただ、お金使わないとエージェントは儲からないから。

参加者：今回、サッカーがすごいなと思うのは、政府保証が付いたことですよ。

五香：いや、まだ閣議了解ですね。政府保証はこれからです。

参加者：今政府保証を取るために動いているかと思うんですが。これは、スポーツにとってすごく大きなことだと思うんですよ。オリンピックの時は、東京としては財政的にいらなかったんですけど、IOC的に欲しいというのであえて付けて、その後サッカーに付けると。実は、ラグビーも動いたんですけど、ラグビーはだめだったんですよ。

五香：でも、僕ら財政保証はないですよ。財政保証は FIFA の条件に入っていないので必要ないんですよ。

参加者：そこがまた違うところですよ。財政破綻はしないってことなんですよ。

五香：10も国があると、どこでやるかで全然バジェットが変わってくるというのが FIFA のロジックなんですよ。開催国が決まってから配分について決めましょうということになっていますね。お互いに損をしないように。

中塚：招致の予算規模から言うと気の毒だなという気もするんだけど、だから国内向けの PR が不足になっているということですよ。

五香：だから国内向け PR はお金をかけて新聞告知を打ったり、ビラを配ったりということではないと思っているんですよ。有識者の方や影響力のある方にしゃべってもらおうということをやっていくことが 1 番リーズナブルだと思ってはいるんですけど、これからののでどこまでいけるかということですよ。

中塚：その取っ掛かりとしてのこのサロンの月例会の意義というのは？

五香：ありますよ。

中塚：どういうところに広がっていくかが見えないあたりがこわいけどね（笑）。

白髭：高校サッカーの時に招致のことを場内アナウンスで流した方がいいのかってことを言っていたじゃないですか。

参加者：一応、駒沢は流しましたよ。横断幕も貼りました。

## <2002 年 FIFA ワールドカップの再検証を！>

中塚：話をお聞きしていると、2002 年を再検証する必要があるような気がしますね。つまり、ワールドカップって何？というのを、知らない人も増えてきている訳だから。どんないいことがあって、どんな問題があってというところを、もちろん我々で確認しつつ、招致活動の中心にたっている人たちにも理解してもらって、一般国民にも知ってもらって。それをやらなくちゃいかん気がしますね。

高田：招致の実働部隊は業務的にもういっぱいいっぱいですか？

五香：かなり少ない人員でやっていますからね。

高田：例えば、そういうフィードバックが来たとして、ああそうだねと思っても、実際に動ける人がいないという状況が起こりかねないですよ。

五香：だけど、言われぬより言われた方が反映できる可能性は高まります。

高田：2002年と今とでは、日本サッカー協会の登録者数は明らかに増えていると思うんですよ。JFAの登録制度がしっかりしてきて。

五香：選手やチームに限って言うと、明らかにというほどは増えていないですね。

高田：情報伝達ということ言えば、サッカーファミリーのルートを使って、その人たちに知ってもらって、その人の周りにはいる人たちにも知ってもらうのがいいと思うんですよ。日本サッカー協会と地域の協会はつながっているはずなんですけど、そうであってそう感じていない人がローカルでは多いので、こういうのをきっかけに一緒にやっていけるといいと思うんです。実は、サロンのような勝手な団体で自由に動けるところが、力を発揮したり。やる気のない奴はやらないし、やる気のある奴は手弁当でもやる。そこにはリスクもあるとは思いますが。

中塚：あえてサロン“2002”と言っている訳ですから（笑）。

高田：2002年の検証というのは、良いところも悪いところも絶対にあって、良いところはさらに上げていって、悪かったところはじゃあどうすればいいのというのを、警察とか国も含めて、規制ばかりしているのを緩めた方がいいんじゃないの、とか。そういう「検証」をサロンでやって何か出すというのもおもしろいじゃないですか。

参加者：今だからできることというのもあるんでしょうね。2002年直後にやった時とはまた違った見方ができると思うので。

参加者：キャンプ地で今も残っていることを、地元メディアに一斉に取材してもらおうか。そうしたらみんな無料でやってくれるんじゃないの。テーマさえ与えれば。

牛木：それはおもしろいですね。2002年のこういうのが残っていますという形でパンフレットになったりしたら、へたな電通式のものより良いんじゃないですか。

高田：高校サッカーのように日テレ系列に全国何ヶ所かでやってもらおうとか。

牛木：最近嫌なのは、パンフレットを見ると、電通で作ったな、博報堂で作ったなというのが分かってしまう。もっと心のこもったものを作りなさいよと言いたいよね。

### Ⅲ. まとめ

中塚：そろそろ時間なので、そのあたりも含めて最後に五香さんから、今後の展望やサロンへの期待をお願いします。

五香：今日はありがとうございました。皆さんとお話していて改めて反省したのは、テクニク的なところを普段考えていることが多いので、サッカーファンの目線の原点というか、そもそもワールドカップをなぜ今やるのというところから、僕ら出発できていないこともあったりして。やれと言われたからやっていますというのが実は最初はあった訳ですよ。その中で、やるべきだなと僕は今思っているんですが、そこを常に持つておかないと説得も PR もできないなというのが、改めて課題として思いました。お金がないと皆さんにお伝えしながらも、なくてもできることは結構あるなど今日お話を聞いていて思いました。2002年の時を思い起こさせる何かがあるいは、その時と比べて今どうなんだという何かがあればいいと思いました。

あとは、サッカー人気が停滞しているという我々の認識なんですが、どう盛り上げていくかっていうのは、やっぱり代表もそうですし、指導者、指導体制も大事だと思うんですが、その中の1つとして招致というものがあるべきだと思うので、それをどう活用できるかということをご皆さんも考えていただいて、議論していただければありがたいなと思います。

以上（続きは「ルン」で）